
 学 会 記 事

第 85 回新潟内分泌代謝同好会

日 時 平成 19 年 4 月 21 日 (土)
午後 3 時～

場 所 万代シルバーホテル
5 階 昭和の間

I. 一 般 演 題

1 閉経後骨量減少症患者に対する塩酸ラロキシフェンとエストリオール併用療法の治療効果に関する検討

八幡 哲郎・富田 雅俊・田中 憲一
新潟大学医歯学総合病院産婦人科

【目的】塩酸ラロキシフェン (RAL) およびエストリオール (E3) はともに閉経後骨粗鬆症の治療薬として使用されている。前者は、E2 製剤と同等の骨量増加作用を有するが、更年期障害に対する効果はなく、ほてりなどの更年期障害様の副作用が報告されている。一方後者は E2 と比較すると骨量増加作用は弱い、更年期障害に対し有用であり、乳腺や子宮内膜への作用が弱いことから安全性の高い薬剤である。本研究では RAL と E3 併用による骨および更年期障害への効果を検討した。

【方法】当科更年期外来を受診した 65 才以下の骨量減少/骨粗鬆症患者 30 名を対象とした。無作為割付けにより RAL 単独群 (60mg/day), E3 単独群 (2mg/day), RAL-E3 併用群の 3 群に分類し、前方視的に 12 ヶ月間の観察を行い、治療前および 6 ヶ月後の腰椎骨密度、尿中 NTX, Kupperman 指数の変化を比較検討した。

【成績】6 ヶ月後の腰椎骨密度の変化率は RAL

単独群, E3 単独群, RAL-E3 併用群でそれぞれ, +0.8%, +0.4%, +1.2%であった。尿中 NTX はそれぞれ 15.3, 9.8, 20.1 nmolBCE/mmolCr 低下した。Kupperman 指数は 6 ヶ月後に平均 +2, -19, -15pts の変化が認められた。E3 単独群では 10 例中 4 例が治療脱落症例となったが, RAL 単独群, RAL-E3 併用群ではそれぞれ 1 例のみであった。

【結論】RAL-E3 併用療法は RAL 単独投与と同等の骨量増加作用を認め, Kupperman 指数の低下が認められた。本治療法は更年期障害を有する閉経後骨量減少/骨粗鬆症患者に対する有用な治療法であると考えられた。

2 小児のメタボリックシンドロームと出生体重の関連

菊池 透・長崎 啓祐・樋浦 誠
田中 幸恵・小川 洋平・内山 聖
阿部 裕樹*

新潟大学医学部小児科
新潟市民病院小児科*

肥満小学生 (男 261, 女 125 名) を対象に, 出生体重とメタボリックシンドローム (MS) の発症との関連を検討した。対象を出生体重により低, 中, 高体重群の 3 群にわけた。肥満度, 腹囲, 血圧, ALT, LDL-C, HDL-C, TG, IRI, FBG, HbA1c を測定し, 日本肥満学会の診断基準をもとに小児肥満症の判定を行った。また, 小児期メタボリック研究班の暫定基準である腹囲 80cm 以上かつ, 血圧 125/70mmHg 以上, TG \geq 120mg/dl あるいは HDL-C $<$ 40mg/dl, FBG \geq 100mg/dl のうち 2 項目を満たす例を MS と判定した。低体重群の MS の相対危険度は, 他の 2 群に比べ男子 1.9 (1.09 ~ 3.32) 女子 5.1 (1.96 ~ 13.45) であった。また, 低体重群ではインスリン, HOMA-R が高値であった。日本人の肥満小児でも, 出生体重が少ない方が高インスリン血症, MS に進行しやすいことが推測された。小児期からの MS の予防には, 乳幼児期に適切な生活習慣を身につけることの他に, 健全な妊娠出産ができるような学齢

期の健康教育が必要であろう。

3 褐色細胞腫とアドレノメデュリン — 続報 —

鈴木 克典・渡辺 竜助*・滝沢 逸大**
 済生会新潟第二病院代謝内分泌科
 済生会三条病院泌尿器科*
 新潟大学医学部泌尿器科**

〔症例1〕50歳男性。'05年8月に腹部CT上偶然両側副腎腫瘍を指摘され、10月17日当科紹介受診。血圧104/66mmHg、血中カテコラミン正常、尿中メタネフリン分画高値、MIBGシンチグラフィにて左副腎の集積を認め、正常血圧褐色細胞腫と診断した。'06年8月腹腔鏡下左副腎摘出術施行。術後血中、尿中カテコラミンは正常化。成熟型アドレノメデュリンは術前高値から術後更に高値になった。

〔症例2〕23歳男性。'06年1月13日左眼中心視野障害を主訴に近医受診。両眼網膜出血、血圧188/140mmHg、HbA1c 6.9%を認め、1月16日当科紹介受診。血中カテコラミン高値、尿中メタネフリン分画高値、腹部MRIにて左腎門部にT2強調像を呈する腫瘍を認め、持続性高血圧型褐色細胞腫と診断した。8月腹腔鏡下左傍ガングリオン摘出術施行。術後血中、尿中カテコラミンは正常化し、血圧も正常化した。成熟型アドレノメデュリンは術前正常値から術後高値になった。

褐色細胞腫の正常血圧を呈する機序としてアドレノメデュリンの関与が報告されている。本症例1（正常血圧）ではアドレノメデュリンがカテコラミンに対して拮抗的制御作用様にはたらき正常血圧に寄与していたのではないかと推測した。

4 抗アルドステロン薬が奏効した糖尿病腎症の1例

山田 絢子・羽入 修・小菅恵一朗
 良田 千晶・小原 伸雅・岩永みどり
 伊藤 崇子・上村 宗・平山 哲
 伊藤 正毅・相澤 義房

新潟大学医学部第一内科

55歳男性。28歳時に口渇、体重減少自覚するも放置。50歳時に視力低下から増殖型網膜症を指摘され糖尿病と診断。同時に顕性腎症前期も指摘された。インスリン療法に加えACEIとARB併用療法を開始しHbA1cは5～6%台、血清Crは0.7～0.9mg/dlで推移していたが、55歳時、尿蛋白が徐々に増加し4g/日以上に達すると共に著大な浮腫と約2ヶ月間で10.8kgの体重増加、呼吸困難も呈したため緊急入院した。安静、飲水制限、蛋白制限、塩分制限、多剤併用降圧療法、ループ利尿薬静注にて治療を開始した。フロセミドは180mg/dayまで増量したが浮腫の改善無く、カンレノ酸カリウム200mg静注開始後、尿量増加、尿中Na排泄量も増加し、浮腫軽快、尿蛋白は2g/日台、体重も入院時より15.6kg減少した。Ccrは31.4ml/minから40.1ml/minまで回復した。近年Parvingらは顕性糖尿病腎症に対し、ACEIやARBを最大量使用しているところにスピロノラクトンを追加し8週間使用したランダム化比較試験で、アルブミン尿を約30%減少させたことを報告している。本症例では、抗アルドステロン薬により尿蛋白減少に加えCcrも改善傾向を示した。今後は長期的な効果を観察する必要がある。

5 下垂体前葉機能低下症を来した脳動脈瘤の1例

田村 哲郎・関 泰弘・中嶋 昌一
 県立中央病院脳神経外科

脳動脈瘤自体による下垂体機能低下症は30例程の報告があるのみである。我々は低Na血症から汎下垂体機能低下症と診断した症例を経験した。

症例は83歳、女性。82歳時に頭痛で入院。右海